

# 古代文学をなぜ読むのか

多田一臣

『万葉集』や『源氏物語』などは、長く古代文学の代表作品、すなわち古典としての評価を受けてきました。しかし、近年、そうした評価が近代の国民文化論的な思考の枠組みの中で意図的に作り出されたものであることが実証されつつあります。なるほど、それはその通りだろうと思います。しかし、そこでの理解が、一方でナショナリズム批判に直結していることには、やや問題があるように思われます。「国語」という用語や概念に対する批判もそのようなですが、「古典」の価値を声高に述べ立てることは、どうやらナショナリズムの宣揚につながるとする見方があるらしいのです。しかし、こうした批判ないし否定的な見方は、基本的には特定のイデオロギーにもとづく批判に過ぎないと私は考えます。そうした見方においては、ナショナリズムは偏頗・偏向として退けられることになるわけですが、

他方、大国の横暴によって抑圧される小国（ないしは少数民族）のナショナリズムに対しては、そのアイデンティティを支えるものとして、案外と肯定的な評価が与えられりしています。矛盾というべきですが、ここにはあきらかに政治的な判断が作用しています。私がイデオロギーにもとづく批判に過ぎないと言うのは、この意味からです。したがって、そうした観点に立つ「古典」批判に、私は与しなくありません。私は文学研究の自立性を信じていますので、その立場から「古典」の価値を捉えたいと思っています。

\*

以上が前置きです。ここでの私のテーマは「古代文学をなぜ読むのか」ということです。答えは簡単ではありませんが、端的に言えば、現代に生きる私たちを相対化する意味を古代の文学が持っているからだ、ということができま

す。とはいえ、古代の文学を読むのは、それほど簡単なことではありません。むしろ、私たちは古代の人々と同じようには読めないというべきでしょう。なぜなら、言語表現とはそれを生み出す時代の文化の体現であり、いわばその時代の世界観の反映にほかならないからです。現代社会に生きる私たちと、古代の人々の世界観が同一であるはずがありません。とすれば、残された表現を読み解くためには、さまざまな回路を通じて古代の人々の世界観に少しでも近づいていくしかありません。そこから言語表現が時代とともに少しずつ移り変わっていく様子をたどることが可能になります。言語表現史、言い換えれば文学史の問題はそこに現れます。

いま言語表現が変化すると申しましたが、私たちの場合、その基本が日本語であることは動きません。もちろん日本語とは、「日本人」と同様、その輪郭のきわめて曖昧な概念です。しかし、その日本語が、私たちの思考や感性を根本のところで規定していることもまた確かです。

国際交流が日常的になりつつある今日、国際間のコミュニケーションにとって最も重要なのは言葉です。相手の言葉を正しく受けとめることは、それを支える世界観をきちんと認識することにもつながります。それはまた彼我の世界観の違いを明確にすることもあります。ところが、現

代の私たちは、自分たちの言葉がどのような世界観に支えられて形成されてきたかという点について、案外と無頓着であるように思われます。先に、古代の人々の世界観と私たちのそれが同一であるはずがないと申しました。時空の隔たりは、あるいは言語を異にする他国との相違以上に大きなものがあるのかもしれない。その意味で、過去もまた異文化の世界であったことになり得ます。しかし、古代の言語表現に触れてみると、それを支えた世界観が、案外と私たちの日本語の思考や感性に深く根を下ろしていることに気づかされます。このことは、古代の言語表現を読み解く作業を実際に経験しないと、なかなか認識しがたいことかもしれません。

そこで、以下、いくつかの例をもとに、古代の言語表現がどのような世界観に支えられていたのかについて、そのごく一端を見ていくことにしたいと思います。

\*

まず、『源氏物語』について論じたドナルド・キーン氏のエッセイを次に紹介します。

誰でも知っている日本語の特徴の一つは、主語を省いたり、文章を完全に終わらせないでおくといった曖昧さにあります。フランスには、明瞭ならざるはフランス語に非ず、という諺がありますが、日本語の場合は、

明快にして直截的なものは日本語ではない、むしろ漠然とした中に、日本語の神秘性があり、その曖昧な、漠然とした中に、日本人の伝統的な美意識を暗示する、なにか簡素で優雅なものが見つかるとのことです（『日本人の美意識と日本語の魅力』『CEL』四六、一九九八・八）。

曖昧さの中にこそ日本語の神秘性があるといった主張など、やや鼻唄の引き倒しに近いものがあつて、そのまま賛成しかねる点もあります。しかし、主語についての言及は、大切な問題を含んでいます。しかし、ここでの主語という概念は欧米言語字から受け継いだものだと思われまます。したがって、「主語を省いたり」というのは、あまり適切な言い回しとはいえません。ここは、むしろ主語の有無という点から見ておくべきでしょう。

この問題を考えるのに相応しい例を、『源氏物語』から挙げてみます。

小高き紅葉の陰に、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたるもの音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出でたるさま、いとおそろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたる心ちすれば、御前なる菊を折り

て、左大将さしかへ給ふ。日暮るるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつるひ、えならぬをかざして、けふはまたなき手を尽くしたる入り綾のほど、そぞろ寒く、この世の事とおおほえず（『紅葉賀』）。

（大意）小高い紅葉のかけに、四十人の楽人の円陣の音に調和する松風は、まことの深山おろしかと聞こえて吹き乱れ、色とりどりに散り交う木の葉の中から、青海波の舞の輝き出てくる様子は、本当に恐ろしいほどすばらしく見える。髪に挿した紅葉がひどく散ってしまつて、照り映える顔の美しさに圧倒される感じがするので、御前に咲いている菊を折って、左大将が挿し替えなされる。日が暮れる頃に、ほんの少しばかり時雨で（雨がさつと降つて）、空の様子までもが感じ入っているかのようなのであるのに、光源氏がこうも美しい姿に、菊の花のとりどりに色変わりした言いようもなくすばらしいのを髪に挿して、今日はこれ以上ないほどの技巧を尽くした入り綾（退場の際の技巧を凝らした舞い納め）の趣は、ぞつと寒気がするほどで、この世のこととも思われない。

桐壺帝の朱雀院への行幸に際して、光源氏が頭中将を相手に青海波を舞いますが、ここはそのあまりの見事さに入りびとが感動する場面です。たしかに曖昧でわかりにくい文章です。キーン氏の指摘ももつとだと思われれます。ここで特徴的なのは、自然と人事のつよい融合です。しかも、その自然はむしろ天の意志と言ひ換えうるようなものとして現れています。なぜなら、ここには光源氏の舞のすばらしさに天までもが感応したことが描かれているからです。むろん、この部分全体は語り手の視点から叙述されていますから、「聞こえて」「見ゆ」「おぼえず」という受動的な言い回しは、舞に感応して引き起こされた自然現象（「松風」や「しぐれ」）が、天の意志としてそのまま語り手の感覚の中に依り憑いたことを示しているともいえます。しかし、受動的だということとは、その主体がむしろ天の側にあることを示しています。ここは、光源氏の美しい舞の姿を天の側からの視点によって表現した部分であるということもできます。——以上のあらまはしは、古橋信孝氏の理解を借用したのですが、氏はさらにこの部分の表現について、「地上に属する語り手は、天の側から書くことはできず、天の意志を感じることしかできないので、そこでこうした文体が成立した」との評言を付しています（古橋信孝『和文学の成立』）。これを現代語に翻訳しますと（大意参

照）、文脈の錯雑としたきわめてわかりにくいものになってしまします。現代語（現代人）が、こうした天の意志を受けとめるような文体から遠ざかってしまったところに、わかりにくさの生ずる理由があるのだと思われれます。

しかし、実は、こうした天の意志——それを再び自然と言ひ換えてもよいかと思いますが——を受動的に受けとめるような文体こそが日本語の基本なのであり、その拠るところは、外界に対して受動的なありかたを志向する世界観にあつたと考えられるのです。主語がはっきりしないという日本語の特徴はおそらくそこに由来します。右に掲げた『源氏物語』のような、自然と人事を融合させた特異な文体がその典型であるわけですが、それを遡る上代の例を対象にしながら、この問題をさらに深めて考えてみたいと思います。

『古事記』に次のような歌謡があります。

狭井川よ 雲立ち渡り

畝傍山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす

（大意）狭井川のあたりから雲が湧き起り、畝傍山では木の葉がざわめいている。風が吹こうとしている。

神武天皇の死後、皇位継承争いが生じます。九州の豪族の娘から生まれたタギシミミが、神武の皇后イスケヨリヒ

メを妻とし、さらにイスケヨリヒメから生まれた三人の子を殺そうとします。この歌謡は、タギシミの陰謀を知ったイスケヨリヒメが、身に迫る危険を子どもたちに知らせるために歌ったもの、と説明されています。「風吹かむとす」は、畝傍山の木の葉のざわめきから察知される不安の一つの解釈であるといえます。陰謀の暗示といつてもよいでしょう。しかし、なぜ木の葉のざわめきが不安を感じさせるはたらきをもつのでしょうか。自明のようにも思われますが、自然がメッセージ性をもつものとして把握されていることを示しています。そこから自然がなぜ比喩となりうるのかという問題が出てきます。

そこで、以下、数年前に刊行した小著の記述をそのまま繰り返すことにします（多田一臣『古代文学表現史論』）。小著では、まず吉本隆明氏の示唆的な見方を紹介しました。人間にとって、言葉は世界（外界）とかわるためのきわめて重要な意味をもつ道具ですが、そのありかたは世界の各地でみな異なっています。言葉がそれぞれの世界像によって支えられる以上、その違いは世界認識の方法の違い、つまり世界観の違いを意味することになります。そこで、吉本氏は、一人の人間の生長過程の中で、言葉がどのような獲得されていくのか、という問題を胎児の段階から考えようとししました。なぜ胎児が問題かといえ、日本人の子

どもであつても、欧米社会で生まれ、欧米語のみの社会で育てられれば欧米語を母語とするようになるからです。母語修得にあたっては、どうやら十歳という年齢が大きな壁になるようです。吉本氏は、その問題を胎児と母親のコミュニケーションのありかたを問うところから考えようとしてました。そうした根源的な考察はたしかに重要ですが、ここで注目したいのは、そこに獲得された言葉のありようが、日本語あるいはそれと類縁関係にある言語と、インドヨーロッパ語群の言語とで、きわめて大きな違いをもつことが指摘されている点です。前者（日本語あるいはそれと類縁関係にある言語）は後者（インドヨーロッパ語群の言語）に比べ、未成熟な音の段階で停滞したのだといえます。しかも、その停滞は、自然に対する前者の習俗が、後者のそれと極度に違っていたために生じたといえます。前者は、「自然そのものが生命の存続にとって本質的に温和で好ましい食糧、住居、着衣の条件をもち、身体を自然のなかにおくだけでよい環境で永続する世代体験をくりかえし」たのだといえます。その結果、前者では、「自然のなかに自然の音声（風、雨、動物、植物などの音）とおなじ位相で永続的におかれ、自然の音声も人間の行為の遅延としての言葉とおなじ位相におかれる状態を、永続的な言語化の外的条件におくことができた」というのです。吉本氏独自の

言い回しもあつてわかりにくいところもありますが、日本語あるいはそれと類縁関係にある言語では、自然音と人間の言語音と同じ言語音として感じるようになったということでしょう。そのために、樹木や草木に吹く風の音を、風や木が悲しい声を出していると感じるような感性、言い換えれば自然音を比喩として受けとめるような感性が生み出されたということです。氏は、そこに先の『古事記』の歌謡を掲げ、「現在のわたしたちには、ただ景物を叙した歌としかうけとれない。だが、神話の記述のとおり、何か伝えたいことのある物語のなかにおけば、雲が起る……木の葉が騒がしく鳴る……を、不安の心を伝える暗喩としてうけとることができると結論づけています（吉本隆明『母型論』）。

吉本氏の理解の前提には、日本人の脳のはたらきの特異性を指摘した角田忠信氏の研究があると思われれます（角田忠信『日本人の脳』）。角田氏は、この研究の中で、日本人の自然音の聴き方や感じ方の特性が欧米人のそれとは違っていることをあきらかにしました。人間の脳は左右一対からなりますが、左脳は優位半球として言語や計算などの知的作業を受け持ち、右脳は反対に劣位半球として音楽や雑音などの非言語的な音を受け持ちます。ところが、日本人は、言語音のみならず、あらゆる人声、虫、動物の鳴き声、

邦楽器の音までを左脳が分担するのだといえます（欧米人は言語音以外は右脳で処理します）。言い換えれば、日本人は自然音を言語として受容していることになりました。ならば、自然音は一種の言葉として日本人の耳に聞こえていくことになりました。この角田氏の研究と吉本氏の指摘とを重ねあわせれば、自然音が比喩とされていく経緯はあきらかです。そこで、木の葉のざわめきは、不安を暗示するメッセーjジ性をもつことになりました。だからこそ、イスケヨリヒメの歌謡は、子どもたちに危険を知らせる役割を果たすことができたのです。

もつとも、欧米人が木の葉のざわめきを本当に言葉として聞くことがないのかどうか、疑問も残ります。その疑いを起こさせるような事例がいくつも見つかるからです。自然音と人間の言語音と同じ言語音として聞くことが、はたして日本語あるいはそれと類縁関係にある言語だけの現象であるかどうかについても、なお断定しがたいところがあります。つまるところは相対的な違いに過ぎないのかもしれませんが、自然音を一種の言葉として聞くような感性を日本人が持ち続けてきたことはどうやら事実のようなことです。

\*

日本人のこのような感性は、自然現象の中に神の意志を

見ようとする感性と言ひ換えることもできません。その前提には、原始的な超自然観、すなわちアニミズム的な思考があるといつてもよいでしょう。そこに自然＝神を主体とするような意識が生み出されます。その場合、人間は受動的な立場でそのような自然に向きあうこととなります。そこに生じた受動的な意識が、どうやら日本人の世界観の根本にあるらしいのです。

そのことをよく示しているのが、時間の観念だろうと思います。古代の日本人は、昼や夜を単なる時間としてではなく、いつの間にかこの世界に忍び寄る不思議な力の現れと考えていました。まだ真つ暗なうちから木々に宿る鳥たちは囁りはじめますが、古代の日本人は、人間には察知できない朝の気配を鳥たちが敏感に感じているのだと考えました。季節の訪れについても同様です。春には花が咲き、秋には木の葉が色づきますが、それもまたそれぞれの季節の靈威が花や木の葉に宿り、そうした現象を引き起こすのだと考えました。春や秋が訪れることを、古語で「春去る」「秋去る」と表現します。そのサル（去る）について、辞書は「こちらの気持にかかわりなく、移動して来たり、移動して行ったりする意」（『岩波古語辞典』）と説明しています。「こちらの気持」とは、人間の意志と言ひ換えてもよいでしょうから、その場合の行動の主体は向こう側

（神の側）にあることとなります。実は自然現象のほとんどについて、古代の日本人は同様な受けとめかたをしてきたようです。サル（去る）とはやや性質を異にしますが、自然現象を現す動詞を見ればそのことはあきらかです。そうした動詞には、もともと他動詞であるものを自動詞として用いた例がきわめて多いのです。以下にいくつか掲げてみましょう。

波——ヨス（寄す）

風——フク（吹く）

雪——ツム（積む）

露・霜——オク（置く）・ムスブ（結ぶ）

枝——サス（差す）

根——ハル（張る）

人体——フルフ（震ふ）

これらの動詞について、木下正俊氏は次のような説明を与えています。

広く自然現象や人体などの、自分の意志ではどうすることもできないような、いわば不随意現象を表現するに当たって、何かそのような作用を起こすものがあるのだ、と考えることが、かなりあつたと知られる。

……「波寄す」「風吹く」などの表現は、「神」が「波をして寄らしむ」「風をして吹かしむ」と考えた古代

的思考の産物と言つてよいのではないか（木下正俊

『万葉集語法の研究』）。

先に他動詞、自動詞といったのは木下氏の言い方を用いたからなのですが、本当は自然現象を受動的に受けとめるような感性こそが、こうした表現を生み出していると思ふべきでしょう。その意味で、他動詞、自動詞という言葉はあまり適切とはいえません。これらは自然、すなわち神の側を主体とする表現といふべきなのです。

古代の日本人が受動的な意識を持ったのは、自然現象に對してだけではありません。外界の事象の多くに對しても、彼らは同じように受動的な姿勢で對しています。その姿勢が、主語が曖昧だといわれる日本語独自の表現を生み出しているのです。外界の事象を把握する際、「我」の位置を絶えず確認するところから出発する欧米語（おそらく中国語も同じだろうと思います）との違いは、ここにおいて明瞭です。その違いが、果たして先の吉本氏の指摘のように、彼我の環境の違いにもとづくものなのかどうかの判断は、正直なところできないことかもしれません。それへの疑問もないわけではありません。しかし、外界に對して受動的な接し方をする思考や感性を、現代にいたるまで日本人が持ち続けてきたことはやはり間違いないことだといえそうです。

\*

これに関連して注意したいのは、一般に受身の助動詞として知られる「る（ゆ）」「らる（らゆ）」の持つ特別な位相です。私は国語学の専攻ではないので、誤った理解があるかもしれませんが、一般に受身・自発・可能の意義を持つとされる助動詞「る」「らる」は、使役の助動詞「す」「さす」「しむ」とともに、分類上特別な範疇を形成しているようです。これらは、助動詞の中で最も上位に位置し、用言と一体化して用いられる言葉とされます。さらにはその性格から、助動詞というよりも、受身・自発・可能あるいは使役の意味をもつ派生動詞の接尾語と捉えるのが、文法学者の間では有力な理解のようです。

とくに目を引くのは「る」「らる」について、時枝誠記氏が次のような指摘を行っている点です。周知のように、時枝氏は言葉に詞と辞の区別を与えます。詞は概念過程を含む言葉、辞は概念過程を含まず、いわば表現主体の意思の直接的な現れとみなしうる言葉、という区別です。いわゆる助動詞は辞に属しますが、時枝氏によると「る」「らる」以下は、むしろ詞と考えるべきだということです。たとえば、受身の「る」の事例、

彼は人に怪しまる。

の「る」について、「客体的な彼についての或る事柄の表



現であつて、主体的な何ものについての表現でもない」とし、また、「可能の「らる」の事例、

我はこの問題に答へらる。

についても、「話手の可能の表現の像に見えるが、それは主体的なものの直接的な表現でなく、主体的なものを客体化して表現してゐるのである」と説明します（時枝誠記『国語学原論』）。

ここで、重要なのは、これらの「る」「らる」が、ある事象が生起した時に、事象とその受け手との關係を明示する表現であることでしょう。時枝氏によれば、その關係は表現主体からは客体化して把握されていることになりました。それは、言葉を換えれば、事象の側が絶対化されていることでもあるはずで、時枝氏は、「る」「らる」の本義を、「事物の自然的実現の概念を表したものと見ていますが、むしろ外界に対する受動的姿勢が、この表現の支えになつてゐると思われまゝ。その意味で、山田孝雄氏が「る」「らる」について次のように述べていることは、いかにも示唆的です。

「る」「らる」は状態性の間接作用をあらはすものにして、その最も根本的なりと認めらるるは受身をあらはすものなり。……それより一転して自然にその事の現はるゝ勢にあることを示す。今これを自然勢といふ

べし。この自然勢が受身の一変態なりといふことは、その勢の起る本源は大自然の勢力にありて人力を以て如何ともすべからぬことを示すものにして、人はそれに対して柔順なるより外の方途なきなり。これ即ち大なる受身なりといふべきなり。この自然勢より再転して文の主体に或る能力の存する義を表はすなり（山田孝雄『日本文法学概論』）。

受身・自発・可能の根本が「大自然の勢力」に本源をもつ「大なる受身」にあることが明確に説かれています。「大自然の勢力」とは、絶対化された外界そのものの謂いとして捉えることもできるはずで、

一方、使役の「す」「さす」「しむ」は、受動的な關係をより直接的に明示し、それをさらに客体化して現した形であると考へられます。いづれにしても、これらの助動詞は、外界の事象に対して受動的に接してきた古代の日本人の思考のありようをよく示す表現であつたと見ることが出来ます。吉田金彦氏も、助動詞「る」が動詞ヲ行再活用語尾から發達したことを説いていますが、その具体例として、『万葉集』から以下のような言葉を挙げています。

離る 変はる 益さる 留まる 賜ばる 障はる 懸  
かる 上がる 重なる 定まる 隔たる 返へる 極  
まる 給はる 止まる 含まる 曲がる 纏はる

吉田氏は、これらの言葉が動作・作用を持続的な属性として把握したものであること、そのような相への活用化が一定の意味を持ち、後に受動態へと移行したことをあきらかにしています（吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』）。用例は相当な数に上りますが、これらの動詞の動作・作用も、基本的に受動的な意識で把握されていたと見る事ができるでしょう。<sup>(1)</sup>

\*

以上、古代の人々の世界観が、私たちの日本語の思考や感性に深く根を下ろしている例を具体的にながめてきました。むろん、ここではその一端をかい撫でしたに過ぎません。しかし、日本語について考える場合、こうした作業を積み重ねていく必要があることは間違いないことだと思います。ですから、それが「古代文学をなぜ読むのか」ということの答えの一つになると思います。もともと、こうして日本語の性格をあきらかにし、たとえばそれが欧米語とどこか違うのかということを強調してくると、日本語の優位を主張するナショナルリズムの言説（日本人にしか日本語はわからない」というような）と受け取られかねない面もたしかに出てきます。日本語が日本人独自の思考や感性と分かち難く結びついているといった物言いをする、そのような批判にますますよく曝されることとなります。し

かし、最初にも述べましたように、私の意図はそうした政治性とはまったく無縁なところにあります。日本語（曖昧な言い方に過ぎないことは冒頭に述べました）という母語が私たちをつよく規定している以上、それを支える世界観を歴史的にきちんとたどり直してみることは、私たちの存在を確認する意味でも必要なことであると考えます。そのためにも古代の言語表現を読み解く作業は大いに意味あることだと思っています。

注

(1) 『岩波古語辞典』『基本助動詞解説』も「る」「らる」の基本的意味を「動作・作用・状態の自然展開的・無作為的な成立を示す」としています。とくに「可能」について、「農民が多数を占めた日本では、可能を、人間の技術や闘争によつて獲得するものと見るよりも、自然に随順し、自然の運行の中から結果が湧き出て来るものと把握した。それゆえ、日本には自然の成り行きによる成就をよしとする風が厚く、ものごとが可能となるのも、人為・努力によるとするよりも、自然に成立・出現することと考えた」と説明しており、きわめて示唆的です。これも言葉を換えれば、「る」「らる」が、向こう側を絶対とする表現、すなわち自然Ⅱ外界Ⅱ神を主体とする受動的な表現であることをあきらかにするものといえます。